

# 『続古事談』写本（フェリス女学院大学附属図書館蔵）の 翻刻と国語学的私注（1）

勝 田 耕 起

## 一 はじめに

本稿は、フェリス女学院大学附属図書館が二〇一八年度に入手した『続古事談』写本を正確に翻刻し、かつ、できるだけ読みやすい本文を提供しようとするものである。そして注釈は、日本語学的な関心から語法や漢字表記に関する事項を中心に記すこととする。

続古事談の伝本については岩波書店「新日本古典文学大系」の荒木浩による解説（九〇四〜九一〇頁）が詳しい。同書が底本としているのは名古屋大学附属図書館小林文庫本で、これには生没の明らかな人間の識語があり、それによって他本とのつながりも明らかになっている。また、小林本は欠点もあるものの、諸本で多く脱文になっている部分を有する点で、善い本なのだと考えら

れる。一方、ここに紹介するフェリス本には識語もなく、漢字ひらがな交じり本であること、巻次六巻として巻三を欠く系統であること、複数人の筆跡があること、以外は現時点で何も分からな（表紙の右下に森川竹窓（二七六三〜一八三〇）の蔵書印「古香齋／図書記」がある<sup>（注）</sup>）。翻刻し他本と比較しながら、これから少しずつどのような本なのか見定めていくのである。

## 二 研究教育資源として

研究するにあたって、図書館の奥に「禁帯出」としてしまわれている写本を表に出す必要があった。そこで、図書館にかけあつてカラーの影印本を作ってもらうことにした。『フェリス女学院大学附属図書館蔵 古典影印叢書2 続古事談 写本』（二〇一九、全二五六頁）という2冊だけの非売品で、本学図書館の開架に置かれ、

扱いに特段の気を遣わなくていい一般書として閲覧できる。他大学の学生・研究者でも、図書館相互利用システムを使って借り出すことが可能である。

本稿執筆中の二〇二〇年一月は、新型コロナウイルスの蔓延で遠隔授業を余儀なくされており、「研究資源」としては電子化されたものを利用する（機関リポジトリで論文のPDFファイルを入力する、大学や図書館のデジタルアーカイブで写本を見るなど）ことが多く、改めてその有用性を再確認したが、通常の通学状態で研究なり教育なりに使用するならば、まずは書籍という形態で本学図書館に一冊存在することが最も望ましいと考え、紙媒体を作成したのである。手に取ってページをパラパラめくる（戻る、とばす）という本文把握の方法は単純でかつ非常に効率的で、パソコンのブラウザでインターネット上の写本画像を見る場合のクリック操作、あるいはデバイスの画面に直接触って電子書籍のページをめくる操作（スワイプ、フリック）では実現しにくい扱いやすさだと言える。

本稿のような翻刻注釈や授業での講読といった基礎的研究によつて本写本に公開する価値が認められれば、いずれはウェブ上に写真をアップロードすることになる。もちろん善本であるに越したことはないのだが、仮にあまりよくない本だったとしても、

国語学としては構わない（それなりの使い途がある）と筆者は考えている。粗雑な書写態度のときに、その時代の言語的要素が顔を出す可能性<sup>(注2)</sup>があるからである。

### 三 翻刻の方針―凡例（稿）

- (ア) 原文は漢字ひらがな混じり文。
- (イ) 底本の漢字はそのまま記す。漢字の字体は、本文の解釈に影響がない限り、読みやすいように現行のものに直す。
- (ウ) 仮名遣いは底本のままとする（歴史的仮名遣いに直さない）。
- (エ) 濁点を加えない。
- (オ) 踊り字はそのまま記したが、漢字の繰り返し符合は二の字点「ミ」ではなく「々」とした。
- (カ) 会話文のカギ括弧「」、句読点を付けた。
- (キ) 原文にふりがなはない。原文漢字に特に推定される読み方を付すときには括弧書き（ ）を付ける。歴史的仮名遣いによる。
- (ク) 読みやすいように原文ひらがなに漢字を当てた箇所がある（古辞書などを根拠とし注に示した）。その場合はふりがなに原文のかなを残した。

(例) 原文「帝王は人をあはれみ」↓翻刻文「帝王<sup>ていおう</sup>は人

を憐れみ<sup>あは</sup>]

(ケ) 行間の書込み注記・挿入は本文の挿入位置に(へ)、訂正(置換)は当該文字列の下に「」で挿入する。「歟」は「カ」とする。

(コ) 章段番号は先行する他の注釈書に揃え、話の文頭に( )で記した。底本は話のまとまりごとに改行されており、その改行を優先して示すため、底本が一話とみなしたものである。ついで、( )の章段番号がその前の話の翻刻本文の後半に挿入される形となっている。例…5話、6話

(サ) 誤字と思われるものそのままとし、注を付けた。

(シ) 根拠とした古辞書類は略称で記す場合がある。

・色葉字類抄(前田本||尊経閣三卷本) ↓色。三巻本でも黒川本によるときや、尊経閣本でも二巻本によるときはそのむね記す。伊呂波字類抄 ↓十巻本

・類聚名義抄(観智院本) ↓観

(ス) その他、参照した注釈書や辞書類は注釈中では略称で記したものがあ。末尾の参考文献(とその略称)参照。

#### 四 翻刻と注釈

本文における単語選択、語法、用字などについて、翻刻文の後

に注釈を記した。問題にした語句は、翻刻文中において直後に\*マークが付してある。

#### 【翻刻】

続古事談第一 王道 后宮

(1) 帝王\*は人を憐れみ民をはく、む\*心おはしますへきなり。しかれば、一条院は極寒\*の夜\*は御衣\*を、しのけて\*おはしましければ、上東門院\*「なとかくはせさせ給そ」と問奉り給ければ、「日本国\*の人民\*寒かるらん、われ\*暖に\*て寝たる事、無慙\*の事也」とそ仰られける。延喜\*御門も寒く凍ゆる\*夜は御衣を脱ぎて\*夜御殿\*より投げ出し\*給ける\*といひ伝へ\*たり。

#### 【注釈】

○帝王 源氏物語には三例だけある漢語。桐壺巻では、高麗人の人相占いの言葉「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人」。明石の例は住吉の神に対する祈祷の言葉、若菜上の例は朱雀院の会話文中で桐壺院(父)のことを指す言葉であり、男性による畏まった物言いの中に、和文では一般的に排除されている漢語的表現が顔を出した例と言える。

○あはれみ 〔色〕「哀アハレフ憐愍（以下一八字）」（ア人事）。古語大辞典（小学館）「あはれぶ」語誌「あはれむ」ともいうが、成立の過程からいくと、「あはれぶ」が古い形か。（中略）典型的な和文というよりは、漢文訓読の影響を受けていると思われる文章に多く用いられる。（岩淵匡）。金葉集「あはれまむと思ふ心は広けれどはくくむ袖の狭くもあるかな」（雑上六三三）

○はくくむ 〔色〕「省ハク、ム 育同 孚同」（ハ辞字）。『日本国語大辞典』（以下『日国』と略す）語誌には「ククムは親鳥が雛を羽でもって包み養う意。上代・中古にはハグクムが一般に用いられていたが、中世になるとハゴクムの勢力が強くなり、ハグクムは歌論・注釈書などに用いられるのみとなった。これは、語源が忘れられたことと、当時才段とウ段の交替現象が広く生じていたことによる。しかし、江戸時代になって語源が再認識され、ハグクムの形が次第に勢力を取り戻し、近代には、日常語として復活した。」とある。前田富祺「ハグクムとハゴクム」（二九六五）

○極寒 吳音ゴク、漢音キョク。今昔物語集「極寒ノ時二」（二二・三五）、天草イソボ「gocanno ジブン」（パストルの事）とある。対義語は「極熱」だろうか。宇津保物語「（体調不良ハ）暑気などにやとぞ見給へ侍る。日ごろはかくくくねちの頃に侍れば、苦しうて」（国護）、古事談「極熱之時二ハ取出テ令着給ケリ」（一一六）、

文明本節用集「極寒―熱―暑」（コ時節）、「酷暑」（コ態芒）とある。（極十形容語）の字音語は中世に他に、正法眼蔵（二二卷本）「極少をしらざるのみにあらず、極大おもまたしらざるなり」（発菩提心、宝物集・下「極重の罪人」等がある。鈴木博「抄物語彙考」（『国文学攷』二二、一九五九）はゴクシン（「極真」「極信」など）の和製漢語の可能性に言及したが、雑阿含経「極信不疑」（巻五）のような例が仏典に確認できる。なお、漢語（極）は色葉字類抄には見られず、十卷本の伊呂波字類抄には「極寒」の類義語と考えられる「苦寒」がある（コ暈字、コは「苦」の漢音）。

○夜 ヨ／ヨルの読みについては日野資純『基礎語研究序説』（一九九一、桜楓社）に調査と考察がある。連体修飾を受ける語形は「ヨ」であり、「ヨル」は暗い時間帯全体を言うという説に従う。

○御衣 〔色〕「衣イコロモ又ソ」（イ雑物）、「御衣絹ミソキヌ」（ミ雑物・黒川本）、十卷本のコ篇暈字部に「御衣」がある（訓なし）。東宮年中行事「きよいは衣笥しろはせの蓋ふたに入奉りて」（二一月）、宇治拾遺物語（古活字本）「いみじき宝のをんぞの綿のいみじき、給はらんものとは」（二三の一・陽明文庫本は「御そ」）。『日国』語誌「衣そのものに「御」を冠した「御衣」は仮名書きの確例に乏しく「みそ・おほんぞ・おんぞ」のいずれか決しがたいが、「おほんぞ」であったらうと考えられている。「きもの」佐藤武義『講座日本語

の語彙9巻』(一九八二)。新大系は「おんぞ」と読む。

○をしめて 類話の古事談(三四)、中外抄(上四)は「推脱て」。

○上東門院 じゃうとうもんゐん 藤原道長の長女、一条院の妻  
(中宮彰子、九八八〜一〇七四)の院号。

○日本国 顕戒論「我日本国、(中略)百済王奉渡仏法」(開雲顕月篇第一、最澄、八二〇年)、天草ヘイケ・四「コノ人コソワ Nippongouノ御主ヂヤ」。日ボにはNifon, Nippon, Ippon(シッポン)の見出しあり。

○人民 色「人民ニンミム」(二人倫)

○われ 色「我ワレ吾言朕台儂邛予余已上同」(ワ人事)、「朕チム」(チ人倫)。類話の古事談(三四)は「吾」。

○あたゝかに 色「暖アタゝカニ暖温(以下三字)」(ア辞字)

○無慙 罪を犯しながら恥じないこと。中右記に「破戒無慙之僧」とあり、源氏物語にも一例のみ「むさんの法師にて、忌むことの中に破る戒は多からめど」(手習)とあるが、色葉字類抄には見られない。文明本節用集に「(無)慙 ムザン」(ム態芸)とある。張愚「むざん」の語義変化・形容詞の統語的機能との関わりから「『日本語の研究』一〇(一)、二〇二四)

○延喜 九〇一〜九三三年。醍醐天皇の代の年号。

○さゆる 色「凍サユ寒也 冴潤已上同」(サ天象)。冷え込む

こと。類聚名義抄でサユの訓を持つのは「冴」「凍」「寒」の三字。

○ぬきて 色「脱ヌク解除(以下四字)」(ヌ辞字)

○夜御殿 清涼殿内の天皇の御寝所。源氏物語・桐壺「よるのおとどに入らせ給ひても」。

○なけいたし 色「投ナク擲抛(以下七字)」(ナ辞字、黒川本)、「出イツ又イタス」(イ辞字)

○ける 連体形であることに注意しておく。山内洋一郎「院政期の連体形終止」(『国文学攷』二二、一九五九)は連体形終止が「と」と密接に結び付くこと、「会話性に欠けている」ことを指摘。

○つたへ 色「傳ツタフ」(ツ辞字、黒川本)

#### 【翻刻】

(2) 神璽じんじ\*宝剑、神の代より伝つたはりて、御門\*の御まもり\*にて、さらに、開あけ\*抜ぬく\*事なし。冷泉院うつし心\*なくおはしましければにや、璽\*の笥はこ\*の緘ひびけ(への)を\*、解ときて\*開あけんとし給ければ、笥はこより白雲たちのほりけり。怖おそれて\*棄すて\*給たりければ、紀氏の内侍\*、もとのことく緘ひびけ\*、り。宝剑をも抜ぬかんとし給ければ、夜の御殿ひらくくと\*光ひかり\*ければ、惶おそちて\*抜ぬき給はさりけり。かゝるめてたき\*おほやけの御たから物、目の前に\*失うせにき\*。

## 【注釈】

○神璽 三種の神器のうちの八尺瓊勾玉やさかにのたまがたまの称。色葉字類抄には「神璽」がシ篇量字部にあるが、和訓が無く、声点も付されていないので「璽」字の清濁はわからない。文明本節用集「シンシ」(シ器財門)。天草ヘイケ四・一八「ホウケンヲコシニサイテ xunxun(シンシヲ)ワキバサミ」。日葡辞書の見出しは xunxun のみ。書言字考節用集は「神祇シンギ…(神)明シンメイ…(神)璽シンシ…(神)社ジンジャ」(神祇門・シ)と前後の見出しには濁点がある環境で濁点が無い。和漢通用集「神璽しんし」。ヘボン初版なし、3版「SHINSHINSHINシンシ神璽」、言海「しんじ神璽」。濁音化は近代からか。

○御門 色葉字類抄(黒川本)には「帝ミカト(中略)王天下號也」(ミ・人倫)、「朝ミカト(中略)聴政之所也 朝廷同」(ミ・地儀)とあって、ミカドの語形は確認できるものの、天皇の意味での「御門」の用字は見られない。二巻本も同様(帝、朝廷)。新大系はここを「帝」とする。ただし一話は「延喜御門」で「帝」は使われていない。このような表記の違いが写本の系統・古さなどを考える際に役立つかもしれない。『注解』(御門)に校異なし。泉基博「十訓抄の表記 御門・帝」『武庫川国文』二七(一九八六)は、十訓抄の片仮名本(二類本)では日本の説話「御門」、中国の説話「帝」を使うという傾向と実際の用例分布の解釈を示し、元

禄版本では片仮名本の「御門」の多くが「帝」に改変されていることを指摘している。

○御まもり 同時代の『たまきはる』に「まほりの袋、扇など」「まもり、扇なども参らせ取らせ」「御太刀、御まもりの筥」といった例もあり、現代語の「お守り」(神仏の霊がこもっていて人を守護するという小さな品物)とほぼ同じと考えてよいが、「お」が付いて一語化するのはいづころからか。『日国』は「おまもり」を立項し、『大仏の縁起』の例を挙げるが、これは正しくは『東大寺造立勸進僧正之事』(天和元年一六八一写)のようで、その本文は、  
尼申シケルハ(中略)「大悲ノ像ヲ一寸二分ニイテ、守リニ入レテ、クビニカケシ(中略)若ソレヤ候ラン」ト申ス。僧正(中略)「七歳ノ時、師匠(中略)曰ヤウハ『汝子不知、此像ヲ父母ト見ヨ、定テ汝ガ父母ノ、カケサセツラン』トテ御守リヨリ取出シ下ヨリ以来、一寸毛身ニ不離。是ニテ侍力」トテ出シ給フ。  
とあって、母は「守り」と言い、子は「御守り」と言っている。日葡辞書には「Madori 首に懸けて持つ守り袋、あるいは、聖なる物を入れた袋」とあり、江戸初期では「守り」単独用法が普通だったと考えられる。黄表紙『莫切自根金生木』にも「金は取りよいやうにまとめておくがよい」「まんまと盗人がくればよいが」「これをしまつたら、盗賊よけのまもりをひつばなしておこふ」

(中、一七八五年)と会話文の例があるので、「お」と一体化するのはさらに後ということになる。

○あけ [色]「開アク」(ア辞字)

○ぬく [色]「抜ヌク擢(以下一八字略)脱已上ヌク」(ヌ辞字)とあり、類話の古事談(四)では「脱」が使われている。

○うつし心 正気。正常な心。万葉集・一二・二九六〇「うつせみの宇都思情もわれは無し妹を相見ずて年の経ぬれば(作者未詳)」の例がある。「うつし」はシク活用の形容詞で、卷一二・三

二一〇「あしひきの片山雉立ち行かむ君に後れて打四鶏めやも(作者未詳)」、卷一五・三七五二「春の日のうら悲しきに後れるて君に恋ひつつ宇都之家めやも(狭野弟上娘子)」のような例があるが、中古以降の使用例はない。複合語としては中古以降も、源氏物語・若菜下「うつし人にてだにむくつけかりし人の御けはひの、まして世かはりあやしきものさまになり給へらむをおぼしやるに」(現在存命中の人の意)、賢木「男もこころ世をもてしづめ給ふ御心みなみだれて、うつしさまにもあらず」、とりかへばや物語・中「これはそは世の常の事なれ。年ごろの御ありさまは、うつしごとやおぼしつる」といった例があるので、複合語前項となる要素「うつし」として認識され、とりかへばや物語の「うつし事」のような例が発生したものと考えられる。類例はあるだ

ろうか。阪倉篤義『語構成の研究』四二九頁には(形容詞語幹+名詞)で複合名詞になる例が一六語(うち一例がウツシイハヒ(顕斎)挙げてあり、全語の前項を確認したところ、サカシヒトのように形容詞「さかし」が中古以降も存続する普通のものがある一方、アダシカミのように形容詞として機能している「あだし」が確認できないような問題語も含まれており、「うつし」の類例といえるものは確認できていない。

○しるし [色]「璽シルシ王者印也 神(シ雑物)

○はこ [色]「筥ハコ 函同 匣同(以下七字)」(ハ雑物)

○からけ(の)を 絡げ緒。箱を包むように縛る紐と思われるが、『日国』はこの例のみ。色葉字類抄には「繩カラケナハ」(カ雑物)があり、二巻本には「懸緒カケヲ」がある。カケヲは『今鏡』にも「御簾のかけ緒」あって別物であろうが、カラゲルための緒をカラゲヲと呼ぶ下地(語彙と語構成の型)はあったと言える。

○ときて [色]「説トク 解釈却銷赦泮(以下六字)」(ト辞字)

○をそれて 歴史的仮名遣い「おそる」。[色]「怖オソル 恐懼 慚(以下四六字)」(オ人事・黒川本)

○すて [色]「捨スツ 棄抛(以下四〇字)」(ス辞字)。類話の古事談(四)、富家語(二八三)とも「打棄」。

○紀氏の内侍 [色]「紀キ」(キ姓氏)、「内侍所ナイシトコロ有女

官」(ナ諸社・黒川本)

○からけ 色「緘カラク カカヌ 扼投拏(拏)縛已上同」(カ辞字)とある。掲出順4番目は「拏」とはつきり木編で記されているが、漢字の意味を考慮すると、つなぎ合わせるとという意味で「ツツル」などの古訓を持つ「拏」だと思われる。『日国』は「抱」字があるとするが、「扼」(Ⅱ捻)字と解するべきだろう。二巻本は「緘」字の右にカラクの訓が無く、左傍に「カカヌ」とあり(ただしカカヌはやや疑わしい。名義抄でカラグの訓を持つ漢字からすると、カガルツカヌあたりと合わせて検討したい)。またその漢字は「投拏縛已上同」で「扼」字が無い。峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(東京大学出版会、一九八六)は「説話文学作品に見える俗語」として古事談のカラグを挙げている(八二四頁)。名語記には「カラクル如何(中略)懸ル也」(巻九・二一才)とあり、打聞集「掘り出した箱は」銅ホソキヲ以テカラケタリ(二六)、宇治拾遺物語「檜笠の上を又おとがひに繩にてからげつけて」(八の二)、名義抄「藤ウハツツミカラグツツム」(仏中一二三)などからは、立体的なものに紐を回して固定する(開かないようにする)、という意味が見て取れる。

○ひらひらと 断続的に強弱の光が見える様子。現代語と同じ、モノが翻る例も同時期にある。平家物語・一一・剣「靈劍を抜か

せ給ひければ、夜の御殿ひらひらとして電光にことならず」。今昔物語集・二〇・一〇「猪ノ牙ヲ食出タルガ、石ヲハラハラト食ハ、火ヒラヒラト出テ」。色「燧ヒラメク 電燧」(七天象)

○ひかり 色「光ヒカリ耀輝(以下九字)」(ヒ光彩・二巻本。三巻本の同じ箇所は和訓が無い。また、動詞ヒカルの形では辞字門などにも掲載されていない)

○おちて 色「惶ヲツ恐怖(以下一〇字)」(ヲ人事)。神璽はオソレて捨て、宝剣はオチて抜かなかつた、と対句的なところで用語を変えている。オツは中世以降衰退に向かうが、ここはオソルⅡ意識的、オツⅡ無意識的という関係性が現れている部分。滋野雅民『今昔物語集』における「オチオソル」について、『山形大学紀要人文科学』一五(一)、二〇〇二。青木毅『今昔物語集』における「オチオソル」の文体的性格について、『水鏡』との比較を通して、『訓点語と訓点資料』一一四、二〇〇五。

○めてたき 色「目出メテタシ」(メ暈字、黒川本)、十巻本字類抄「美メテタシ」「妙メテタシ優饒已上同」(メ辞字)

○(目の前)に(うす) 訳せば「目の前テ消えた」となる、格助詞「二」における出来事存在場所を表す用法(『実例詳解古典文法総覧』小田勝、三七六頁参照)。二テの変化したテは御堂関白記―寛仁元年(二〇一七)正月七日「右大臣宣命、以右手、此院では用」左



の例が早いものとされ、院政鎌倉期から増加し室町時代に一般化する。「場所」用法のデは、延慶本平家物語・三本・木曾義仲成長スル事「木曾ノ山下ト云所テソタテケリ」など。

○うせにき 観「失ウスウシナフイタスアヤマツ」(仏下末三五)とあるが色葉字類抄には「失ウシナフ」しか無い。十卷本字類抄には「失 ウシナフ ウス 変 已 泯 死 喪(以下八字) (ウ辞字) とある。文末はずつとケリで述べてきているが、末尾だけはキで結んでいて、キの機能が顕著である。新大系は「作者がこの現実に深く関わることを示す表現」とし、『注解』は「元暦二年に三種の神器が安徳天皇とともに海没し、宝剣のみは遂に発見されなかったという事実を踏まえたもの」と注する。

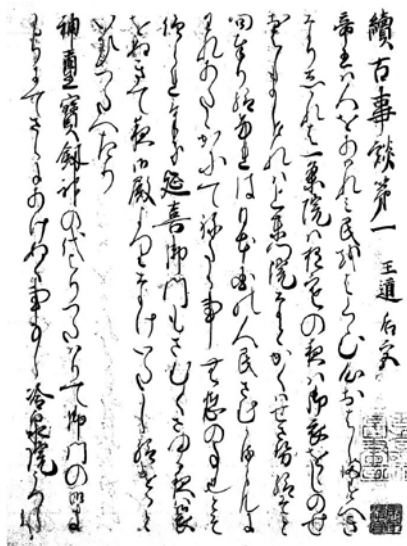
(つづく)

参考文献(とその略称)

- 『続古事談注解』神戸説話研究会(和泉書院、一九九四) Ⅱ『注解』
- 『続古事談』播磨光寿・磯水絵・小林保治・田嶋一夫・三田明弘編(おとうふう、二〇〇二) Ⅱ「おとうふう」
- 『新日本古典文学大系』41 古事談 『続古事談』川端善明・荒木浩校注(岩波書店、二〇〇五) Ⅱ新大系
- 勝田耕起「国語資料としての続古事談『玉藻』四二(二〇〇七)」

(注1) 上下巻とも、表紙に加えて最初の頁(一卷・四巻)の右下にも「古

「香齋圖書記」蔵書印がある。そしてその下に「康章清賞」と思しき蔵書印があるが、国文学研究資料館の「蔵書印データベース」で現時点で照合できたのは前者のみである。仮に後者の判読が合っているとすると、中野康章(一八七四〜一九四七)蔵書だった可能性がある。購入元の古書店目録には「江戸初期写本」と注記があった。



(注2) 小林隆『方言学的日本語史の方法』(ひつじ書房、二〇〇四) 二四九〜二五三頁参照。

(本学教授)